

経営の羅針盤

サイニック (SINIC)*理論

創業者の立石一真は「事業を通じて社会的課題を解決し、よりよい社会をつくるにはソーシャルニーズを世に先駆けて創造することが不可欠になる、そのためには未来をみる羅針盤が必要だ」と考えました。

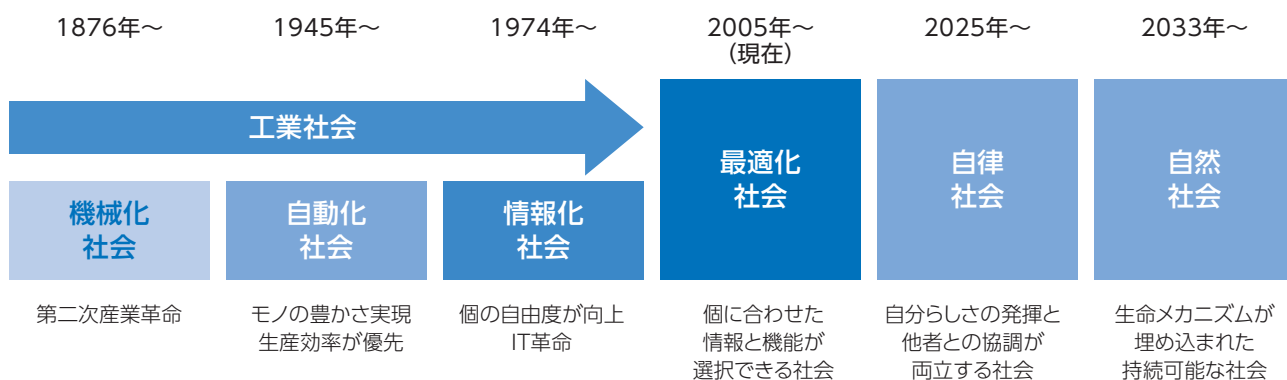
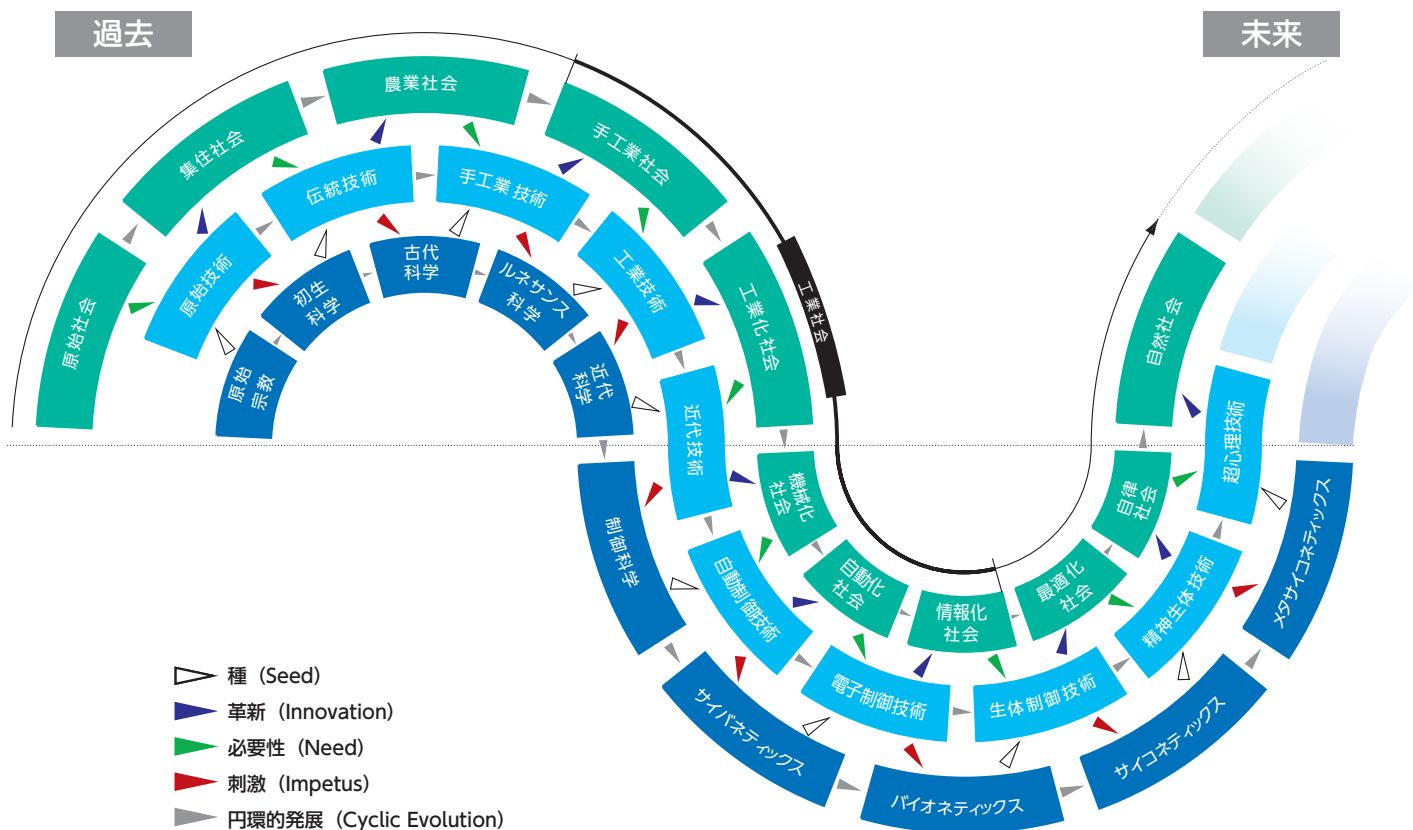
そこで、科学・技術・社会それぞれの円環的な相互関係から未来を予測するサイニック理論を1970年に構築し、国際未来学会で発表しました。

以降、オムロンはこれを未来シナリオとし、経営の羅針盤としています。

*サイニック (SINIC) :Seed-Innovation to Need-Impetus Cyclic Evolution の略。



経営学者のピーター・ドラッカー氏(左)と未来予測論を語ったオムロン創業者の立石一真



情報化社会から最適化社会、そして自律社会へ

サイニック理論は、科学・技術・社会3つの領域を、歴史をたどりつつ未来予測したものです。約100万年前の「原始社会」から、「自律社会」の完成までを社会進化の1周期と捉え、2033年には人類社会の第2周期目となる「自然社会」が、人間の創造性と技術が自然のメカニズムと融和した姿で到来すると予測しています。

2018年の現在は、「最適化社会」にあたり、「モノ中心」から「こころ中心」の社会へと移行する時代とされています。それまでの「工業社会」は、より多くのモノやお金を持つことが豊かさとしてされ、その追求の結果、飛躍的な経済成長を遂げ豊かな社会を実現させました。しかし、一極集中や格差、コミュニティの崩壊など、新たな社会的課題も大きくなり始めました。自律社会は、そのような社会的課題が、新たな価値観に基づいて解決され、集団での価値の共有や、体験を重視すると共に、「こころ」の豊かさを追求し、自分でありたいと思う生き方を、自ら実現させて、生きる喜びを享受できる成熟社会として位置づけられています。SNSにおける承認欲求の高まりや、シェアリングエコノミーの普及、サーキュラーエコノミーの兆しなどは、まさにサイニック理論の予測と符合しているのです。

科学・技術・社会の相互作用から未来を予測

サイニック理論の基本的な考え方は、科学・技術・社会が相互に作用しながら発展していくというものです。情報化社会を例にとると、1940年代に勃興した総合科学であるサイバネティックスやコンピュータ科学の発展が、新しい電子制御技術、プログラミングなどの種(シース)となり、パーソナルコンピュータやインターネットの普及を通じて、情報化社会が実現しました。一方、情報化社会が発達し、より多くのデータを正確に素早く分析・解析したいという社会の必要性(ニーズ)が、CPUやGPUなどの処理装置の性能を向上させ、ディープラーニングなどの人工知能(AI)技術の進化を促し、脳科学や認知科学の新たな展開を刺激していることも挙げられます。そしてこの相互作用による進化には、原動力としての人間の「進歩志向的意欲」があるとされています。

